

【さあ皆さん、手土産の準備です】

万葉の時代に、奈良から出発して西宮を経由する旅をした高市黒人は、現在の神戸市長田区真野町のあたりまで出張して帰ったようです。

いざ子ども大和へ早く白菅の真野の榛原手折りて行かむ 卷3・二八〇番歌

去来児等 倭部早 白菅乃 真野乃榛原 手折而将帰

「さあ皆さん、奈良へ早く。白菅の（生えている）真野の榛の木林の（枝を）手折って行きましょう」と詠んでいます。真野には立派な榛の木が群生していたようで、その枝を手折って土産にすることまでが提案されています。今回の旅には、「いざ」と呼びかけた仲間の中に黒人の妻が同行していたようで、

白菅の真野の榛原行くさ来さ君こそ見らめ真野の榛原

白菅乃 真野之榛原 往左来左 君社見良目 真野乃榛原 卷3・二八一番歌

と、「白菅の（生えている）真野の榛の木林を、行き来するたびに、あなたは見ているのでしょうか（立派な）真野の榛の木林を。（でも私ははじめてなんです）」と詠んでいます。あれっ？っと思うのは、「仕事が終わった早く帰ろう」という夫の言葉に、妻が「そうね」と応えていないところです。観光旅行なら「もっとゆっくりして行きたいわあ」となるかもしれませんが、仕事での出張ですし行程も決められています。実は、当時の旅の歌（羈旅歌）には二つの大きな役割があり、一つは旅先から残してきた故郷や家（家族）を思慕すること。もう一つは、訪れたち地を褒めることが求められていました。今回は夫婦で一首ずつ詠んでいます。もしかしたら、黒人がひとりで二役を演じ、旅の余興として女歌を披露して、土産歌としての趣向を凝らしているのかもしれませんが。

【『City Life』 2019年11月号阪神：神戸版掲載】